

[B年] 聖霊降臨節第8主日(2026年7月12日)**【旧約聖書日課】列王記上 10章1～13節**

¹シェバの女王は主の御名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来た。²彼女は極めて大勢の随員を伴い、香料、非常に多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来了。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、³ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分からない事、答えられない事は何一つなかった。

⁴シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、⁵また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった。

⁶女王は王に言った。

「わたしが国で、あなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。⁷わたしは、ここに来て、自分の目で見るまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことをはるかに超えています。⁸あなたの臣民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの前に立ってあなたのお知恵に接している家臣たちはなんと幸せなことでしょう。⁹あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです。」

¹⁰彼女は金百二十キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモン王に贈ったほど多くの香料は二度と入って来なかった。

¹¹また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから極めて大量の白檀や宝石も運んで来た。¹²王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や、詠唱者のための竖琴や琴を作った。このように白檀がもたらされたことはなく、今日までだれもそのようなことを見た者はなかった。

¹³ソロモン王は、シェバの女王に対し、豊かに富んだ王にふさわしい贈り物をしたほかに、女王が願うものは何でも望みのままに与えた。こうして女王とその一行は故国に向かって帰って行った。

【使徒書日課】テモテへの手紙一 3章14～16節

¹⁴わたしは、間もなくあなたのところへ行きたいと思いながら、この手紙を書いています。¹⁵行くのが遅れる場合、神の家でどのように生活すべきかを知ってもらいたいです。神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。¹⁶信心の秘められた真理は確かに偉大です。すなわち、

キリストは肉において現れ、
“霊”において義とされ、
天使たちに見られ、
異邦人の間で宣べ伝えられ、
世界中で信じられ、
栄光のうちに上げられた。

【福音書日課】マルコによる福音書 8章22～26節

²²一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。²³イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。²⁴すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木ようですが、歩いているのが分かります。」²⁵そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。²⁶イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

列王記上 10章1～13節

¹シェバの女王は、主の名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとやって来た。²女王は非常に多くの従者を連れ、香料や大量の金と宝石をらくだに積んで、エルサレムへやって来た。ソロモンのもとに来ると、彼女は心にあった疑問を王に尋ねた。³ソロモンは問いかけのすべてに答えた。王に分からないこと、答えられないことは何一つなかった。⁴シェバの女王は、ソロモンの深い知恵と、彼が建てた宮殿に目を見張った。⁵また食卓の料理、家臣の居住まい、給仕の振る舞いとその服装、献酌官、それに王が主の神殿で献げる焼き尽くすいけにえを見て、息も止まるほどであった。

⁶女王は王に言った。「あなたの事績とあなたの知恵について、私が国で聞いていたことは本当でした。⁷私は、ここに来て、この目で実際に見るまでは、そうしたことを信じてはいませんでした。しかし、私にはその半分も知らされていなかったのです。あなたの知恵と富は、私が噂に聞いていたことをはるかに超えています。⁸あなたの国民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの御前に仕え、その知恵を耳にしている家臣はなんと幸せなことでしょう。⁹あなたをイスラエルの王座に着けることをお望みになった、あなたの神、主はたたえられますように。主は、イスラエルをとこしえに愛しておられるので、公正と正義を行うために、あなたを王とされたのです。」¹⁰彼女は金百二十キカルと非常に多くの香料、宝石を王に贈った。シェバの女王がソロモン王に贈ったような多くの香料が入って来ることは、二度となかった。

¹¹また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから非常に多くの白檀や宝石も運んで来た。¹²王はこの白檀の木材で、主の神殿や王宮の欄干、詠唱者たちのための琴や豎琴を作った。このように白檀の木材が入って来ることはかつてなかったし、今日に至るまで、そのようなことは見られなかった。

¹³ソロモン王は、自らシェバの女王に贈った物のほかに、彼女が願うものは何でも望みのままに与えた。こうして、女王とその供の者は故国へ帰って行った。

テモテへの手紙一 3章14～16節

¹⁴私は、すぐにあなたのところへ行きたいと思ひながら、この手紙を書いています。¹⁵私が遅れた場合に、神の家でどう振る舞うべきかを知ってもらうためです。神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。¹⁶まぎれもなく偉大なのは、敬虔の秘義です。すなわち、

キリストは肉において現れ
霊において義とされ、
天使たちに見られ、
異邦人の間で宣べ伝えられ、
諸民族の中で信じられ、
栄光のうちに上げられた。

マルコによる福音書 8章22～26節

²²一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れたいと願った。²³イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その両目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。²⁴すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」²⁵そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、見つめているうちに、すっかり治り、何でもはっきり見えるようになった。²⁶イエスは、「村に入っはいけない」と言って、その人を家に帰された。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・7月12日「聖霊降臨節第8主日」の日課主題は「神からの真理」

・旧約日課は、「列王記上」から、シェバの女王がソロモン王を訪ねたという伝承説話箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙一」から、本書簡執筆の目的を記す箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスがベトサイダで盲人を癒した逸話を伝える伝承説話箇所。

旧約日課(列王記上 10章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「前の預言者」の最後四番目に置かれた歴史物語文書。「ヨシュア記」から展開してきたイスラエルのカナン地方定住時代を描く「イスラエル正史物語」の完結部を構成し、王国黎明期を築いたダビデ王からソロモンが王国を継承したことから始まり、ソロモン王没後に南北に分裂したイスラエル・ユダ両王国の滅亡までを物語る。日課箇所を含む「ソロモン王」を物語るまとまり(上1～11章)は、「列王記」全体を貫く主題が技巧的に組み込まれていると考えられるが、そのことを物語るためにか、創作性の高い王宮文学的説話が多く含まれている。それゆえ、「ソロモン王」以後を定式的な王の年代記を枠組みとして展開する上12章以下と比べてとき、ここから歴史的な「ソロモン王」を史実として読み取ることは困難である。

・日課箇所は、前段までで、ソロモン王が神殿および王宮の建築を終え、その統治が確立した結果、周辺諸国にまで名声が知れ渡るようになったと物語られてきたことを受けて、その名声を聞いた「シェバの女王」が大随員を従えて訪問してきたという出来事として描かれている。

・「シェバ」は、考古学的に確定されない王国であるが、通説では、南アラビア(現在のイエメン西方域)あるいはその対岸に位置するエチオピア・エリトリアの領域が古来「サバ」と呼ばれていたとされることに基づいて、この地域を指しているとされる。南アラビアは香辛料の産地として知られ、「サバ」の人々は香辛料等を中心とした交易によって繁栄していたともされる。三大預言書等には、「シェバの人々」が交易商人として言及されている(イザヤ 60:6、エレミヤ 6:20、27:22-23、エゼキエル 38:13、ヨエル 4:8 など)。

・エチオピアの1974年まで存続した王国伝承では、前5世紀に起こったアクスム王国にまで遡って、その王家は「ソロモン王とシェバの女王の間に誕生した息子」を祖とする血筋にあるとされてきた。エチオピア・アクスム王国は、後4世紀にローマ帝国がキリスト教を公認するのと歩調を合わせるように、キリスト教を国教とし、独自の「エチオピア正教」の歴史を重ねてきたが、それ以前から、この地域には多くのユダヤ人が居住しており、同じ後4世紀にはユダヤ人の王国(ゴンダー王国)が成立していたという背景がある。

・日課箇所の説話では、ソロモン王の知恵と富とが称賛の対象とされている。これらは、本書上3章で、王に即位したソロモンが夢の中で神に知恵を求めたことに応じて神から授かったものとして描かれている。

使徒書日課(Ⅰテモテ3章より)

・「テモテへの手紙一」は、「パウロ書簡集」の中で「牧会書簡」のまとまりで扱われる書簡文書。「牧会書簡」は、「同手紙二」および「テスへの手紙」の三書簡文書を指し、パウロが宣教協力者であるテモテおよびテスに宛てて個人的に教会牧会者としての心得を助言するために著した書簡という体裁を有している。現代の聖書学者の中には、これら三文書をパウロ以後の後継者の時代(2世紀以降?)に古代教会の組織制度が整えられていく中で指針とされた牧会者論に基づいて、「パウロ書簡」に擬して著された文書とみなす者もあるが、歴史的には、上述のとおりパウロがテモテまたはテスに宛てた歴史的な文書として読まれてきた。実際、これらの文書の中には、個人的な情報に関する記述も少なくなく、偽書として解釈しなければならない必然性は多くない。

・「テモテ」は、「使徒言行録」16章や「手紙一」および「手紙二」の記述によれば、パウロがシリア・アンティオキア教会の派遣するバルナバ宣教団を離れて独自の宣教団を組織した際に、その一員として選出された若者で、父親はギリシア人であったが母および祖母がユダヤ人の信者として教会に所属しており、幼少期から教会で存在を知られていた者だった、とされる。「パウロ書簡」のうち、「Ⅱコリ」「フィリピ」「コロサイ」「Ⅰテサ」「Ⅱテサ」「フィレモン」には、連名差出人の一人として「テモテ」の名が記されており(なお、「ローマ」および「Ⅰコリ」では差出人としては連記されていないが、言及がある)、彼がパウロ書簡の書記役あるいは伝達役であった可能性も示唆される。「テモテ」は、パウロに見出されて宣教団に加えられた際、未割礼であったため、すでに成人であったがあらためて割礼を受けたとも伝えられている(使徒 16:3)。

・本書簡は、パウロがエフェソを拠点とした二年間の後に同地を離れた際に、同地に残したテモテに教会共同体を指導させることにしたため、引き続き助言をするために著した(1:3)、という体裁で始められている。実際に、テモテがパウロの生前、彼と離れていずれかの地の教会で定住牧会者として活動した時期がどれほどあったのかは、不明。

・日課箇所は、すでに本書簡の中盤であるが、あらためてパウロが本書簡執筆の意図を示そうとしている。

・パウロはここで、エフェソ再訪を願っていることを述べているが、「使徒言行録」の旅行記に従えば、彼はエフェソの地を再訪することは適わず、ただエフェソの教会の長老たちを近隣の港湾都市ミレトスに呼び寄せて面会し、別れの挨拶を交わした(使徒 20:17以下)。おそらくパウロは、エフェソ滞時に深刻な対立に巻き込まれ、教会の分裂を避けるために同地を離れる決意をし、次の拠点となる地を模索している状態にあった。本書簡でパウロが批判的に警戒を促している相手も、(聖書学者が言うような「異端者たち」というよりは)おそらくパウロと対立関係にあったキリスト者のグループが想定されているのだろう。

・16節には讃歌と解される韻文詩が置かれている。初期教会で用いられていた讃歌とも推認されるが、詳細は不詳。

福音書日課(マルコ 8 章より)

・日課箇所は、前週日課に続く箇所、湖を船で渡ってきた主イエスと弟子の一行が「ベトサイダ」に到着し、同地で出会った盲人を癒された出来事として描かれる伝承説話。他の福音書に並行記事はない。

・説話の中で癒されることになる盲人は、「ベトサイダ」の「村」から連れ出され、また「この村に入ってはいけない」と命じられるなど、明らかにこの村＝ベトサイダが忌避される地として描かれている。「ベトサイダ」は、ガリラヤ湖の北端で流入するヨルダン川の東側に位置する町で、「漁師の家」を意味する名称。「ヨハネ福音書」は、この地を「アンデレとペトロの町」と呼び、弟子の「フィリポ」もこの町の「出身であったとしており(ヨハネ 1:44)、おそらく「漁師たちの集住地」だったと推察される。この町は、ヘロデ大王の後を継いで四分領主となったヘロデ・フィリッポス(在位＝前 4 年～後 34 年頃)が拡張開発し、皇帝アウグストゥスの娘ユリアの名を充てて呼称にしたことで知られる。そのためか、「マタイ」と「ルカ」は、主イエスがこの町を名指しで批判されたという伝承を伝えている(マタイ 11:21、ルカ 10:13)。ペトロらはこの町を出て、同じくガリラヤ湖北端に位置するヨルダン川西側にあるカファルナウムに居宅を構えていたことが、各福音書で伝えられている。この町に関連する「マルコ福音書」の言及を辿ると(6:45、8:22)、実際には、この町にいずれかの弟子たちの居宅などがあったために、主イエス一行が繰り返しここに滞在するため訪れていたと推認される。しかし、そこがペトロらの出てきた(捨ててきた)町であるということを踏まえて、主イエスに従う者にとって「捨てるべき古きアイデンティティ」を象徴する「村」として扱われていると考えることができる。

・主イエスが盲人を癒された出来事を、「マルコ」は、10:46 以下にも置いている。それは、主イエス一行が受難のためにエルサレムに入られる直前に立ち寄られた「エリコ」での出来事であり、癒された盲人の名まで伝えられているほか、「共観福音書」が共通して伝えている。他方で、日課箇所の説話は、「マタイ」と「ルカ」は伝えておらず、「マルコ」だけが物語構成上、必須として置いたものと解される。

・この盲人の癒しの描写は、「エリコ」の場合と異なり、二段階の癒しとして展開している。これを、主イエスが「ベトサイダ」では癒しの奇跡に初めは失敗した逸話、と解するのは不適切だろう。むしろ、この二段階は、「見えるようになる」ことの象徴的段階を示していることと解することができる。6:30 から前段までの「パンの出来事」を軸とする一連の展開の中で、弟子たちは、その出来事を繰り返し見ながら、その意味をいまだ理解できずにいる状態にあることが、はっきりと示されていた(8:17～18)。しかし、日課箇所が続く後段で、ペトロは、主イエスから「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問われて、「あなたは、メシアです」と答える。ペトロは、一段階深く、主イエスが「見える」ようになるが、本当にはっきり見えるようになるのは、まだ先のことである。

来週の誕生日 (7 月 12 日～18 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-2「聖なるみ神は」(＝ I 18)は、17 世紀ドイツ最大の讃美歌作曲家 J. クリューガーが作曲した曲に合わせて、20 世紀日本の礼拝学・讃美歌界をリードした由木康が自ら編纂に携わった 1931 年版『讃美歌』のために新たに作詞した讃美歌。
- ・21-448「お招きに应えました」は、20 世紀米国メソジスト教会牧師で 20 世紀後半の英語讃美歌創作運動(ヒム・エクスプロージョン)の中心的担い手となったグリーンが信仰告白式・堅信式のための讃美歌として作詞。曲は、教会旋法第 6 旋法による交唱聖歌(アンティフォナ)のための旋律で、17 世紀の歌集から用いられてきたもの。202 番と同曲。
- ・21-400「たとえ塔は崩れ」(＝ II 45 番「いしづえゆるがぬ」)は、19 世紀デンマークの著名な讃美歌作家グルントヴィイ作の歌詞に、ノルウェーの音楽家リンデマンが作曲。「讃美歌第二編」からは大きく改訳されている。

21-448「お招きに应えました」**Lord, We Have Come At Your Own Invitation**

1. Lord, we have come at your own invitation, / Chosen by you, to be counted your friends; / Yours is the strength that sustains dedication, / Ours a commitment we know never ends.
2. Here, at your table, confirm our intention, / Give it your seal of forgiveness and grace; / Teach us to serve, without pride or pretension, / Lord, in your Kingdom, whatever our place.
3. When, at your table, each time of returning, / Vows are renewed and our courage restored: / May we increasingly glory in learning / All that it means to accept you as Lord.
4. So, in the world, were each duty assigned us / Gives us the chance to create or destroy, / Help us to make those decision that bind us, / Lord, to yourself, in obedience and joy.

21-400「たとえ塔はくずれ」**Kirken den er et gammelt Hus**

1. Kirken den er et gammelt hus, / Står, om end tårnene falde; / Tårne fuldmange sank i grus, / Klokker end kime og kalde, / Kalde på gammel og på ung, / Mest dog på sjælen træt og tung, / Syg for den evige hvile.
2. Himlenes Gud vist ej bebør / Huse, som hænder mon bygge, / Arkepaluset var på jord / Kun af hans tempel en skygge; / Dog sig en bolig underfuld / Bygged han selv af støv og muld, / Rejste af gruset i nåde.
3. Vi er Guds hus og kirke nu, / Bygget af levende stene, / Som under kors med ærlig hu / Troen og dåben forene; / Var vi på jord ej mer end to, / Bygge dog ville han og bo / Hos os i hele sin vælde.
4. Samles vi kan da med vor drot / Selv i den laveste hytte, / Finde med Peder: her er godt! / Tog ej al verden i bytte; / Nær som sit ord i allen stund / Er han vort hjerte og vor mund, / Drot over tiden og rummet.
5. Husene dog med kirkenavn, / Bygte til Frelserens ære, / Hvor han de små tog tit i favn, / Er os som hjemmet så kære; / Dejlige ting i dem er sagt, / Slutted har der med os sin pagt / Han, som os Himmerig skænker.
6. Fonten os minder om vor dåb, / Altret om nadverens nåde, / Alt med Guds ord om tro og håb / Og om Guds kærligheds gåde, / Huset om ham, hvis ord består, / Kristus, i dag alt som i går, / Evig Guds Søn, vor genløser.
7. Give da Gud, at hvor vi bo, / Altid, når klokkerne ringe, / Folket forsamles i Jesu tro / Der, hvor det plejede at klinge: / Verden vel ej, men I mig ser, / Alt hvad jeg siger, se, det sker, / Fred være med Eder alle!